

## 天台座主伝燈相承式



人生には全く予期しない経験をすることがある。今私が見聞することが出来た天台座主伝燈相承式もその例で、私には何かのご褒美のように思える程有り難いことであった。

天台座主伝燈相承式とは、文字通り比叡山の天台座主が代わられて、その法燈を受け継ぐ式で、延暦寺根本中堂で行われる。

先代の座主が亡くなられて、私どもの三男大圓の得度の式を行って下さった滋賀院門跡渡辺恵進師が二百五十五世の座主になると新聞で知ったのはまだ春浅い二月のことであった。父亡きあと、弟妹たちは父の畢生の願いである昭和寺での平和活動に背を向けた。意義は理解出来たとしても、余りにも負担の大きい事業だったから、それは常識的な選択

と言えるのだろうか。

祖父の遺志を継いだ大圓は孤立無援となり精一杯支えている夫も心細い思いだっただけに、目の前がぱっと明るくなった思いがしたのだった。

この春大正大学を卒業した大圓は、天台座主賞を頂いた。一旦社会人になってからの再入学だったし、私たちの定年後だったこともあって、仕送りは授業料、家賃までで、それ以外は大圓が自力で生み出さねばならなかった。勉学に専心させ得なかったことは残念だったが、親として受賞は本当に嬉しいことで、父の一周忌に帰郷した折に、お座主にご挨拶しようと思ったのだった。

大圓の運転で諏訪から名古屋経由で坂本に着いた時は、くたびれて随分遠く来た感じがした。お座主には、去年ご息さんの運転で霧ヶ峰までいらして頂いていた。父の昭和寺葬と戦没者慰霊の法要の導師をお勤めいただいたのだった。その道程がこんなにも遠く、はるばる来て下さったのだと知って胸が熱くなった。

お座主の寺、坂本の円乗院の床の間には、晩年の

父の梵漢般若心経の軸が掛けられていた。私達をお待ち下さったお座主のお心遣いに涙の出る思いがした。大圓が座主賞を頂いたことはご存じなかったよつで、大変喜んで下さつて、大圓の今後のことをいろいろとご心配頂いた。そして五月二十九日に伝燈相承式を行うから大圓も招待しようとおつしやうた。玄関でお別れするときお座主が、

「あんたもよかつたらいらつしやい」

と言われた。本当に思いがけないことで私は、

「まあ嬉しい。よろしいんですか。是非お願いします。」

とたちまち舞い上がった。なんて光栄なことだろうと。

鹿児島に帰つてみると、留守の間に起こつた南九州の大地震で玉石垣がすっかり崩れている。修理の費用も必要である。残念だが今回はパスするしかないとお電話した。ビデオでもいいんですけど。するとお座主は

「そりゃ物書きになるつと云つた人は見とかにやいかん。一生に一度のことだ」

とおつしやる。確かに願つても誰でもが見られる筈のものではない。何とか都合つけて行くことにして、列車の時刻表を調べて計画を立てたのだつた。

二十八日午後四時半の「つばめ」で博多へそれからブルートレイン「さくら」で京都へ湖西線で坂本駅、そこで八時に大圓と待ち合わせと決めた。京都には早朝五時に着いたので、坂本では二時間ほどの待ち合わせとなつた。外気は寒く、早くから店を開けていたパン屋さんに頼んで店内で待たせてもらう。大圓の車の到着にほつとして、そのまま真つ直ぐ比叡山に登る。

どんよりとした空は、いつか雨となつて、傘をさしての受付となつた。比叡山会館の待合室には、お座主のお身内や知人などで、教授や社長などとおほしき錚々たる方々がお集まりである。案内の若い僧から、十時半に根本中堂の門の外でお座主の行列を待ち受けるよつとへの指示があり、傘を手を外に出た。すでに雨は小止みとなつていた。

根本中堂の山門の前から見て、右手はゆるやかな石段の坂である。ピンクのリボンを付けた私たちは



第25世天台座主 親達慈海大僧正

揃いの真っ赤な衣に金色も眩い袈裟を付けて、厳かに先導する。全く美々しいとはこういふあり様を言うのだろう。お座主は、古式の舎人装束の人たちが担ぐお輿の上であつた。ずつしりと重そうな古代紫地の金襴のお衣を纏われ、白い絹の頭巾で頭を覆つていらつしやる。

この例えようもない荘厳な豪華絢爛の行列をお迎えるのは、一般の観衆は全くなく、お式に招待された私たち二百人ほどのみであつた。勿体ないような気が

二列に並び、お待ちする。

やがて雅楽が流れ、ゆつたりとした足取りで列が下りて来る。何十人もの僧侶がお



するが、これはお祭りではなくお式なのだと認識する。

根本中堂は横に長い建造物で大勢の人が詰めている。私たちは右手の報道関係の人たちの後ろから拝見するのだが、立派な柱が邪魔をして、お姿はかいま見るくらいであつた。しかしお唱えの声はしっかりと聞こえた。般若心経が始まつたら引き上げるように指示されていたので、やがて静かに式場を出て、会館に戻つた。

会館の大広間には、お礼の宴として二百人のお膳がずらりと並べられていた。本当は都ホテルでの祝賀会にご招待したかつたが、各界の代表などで席がとれないので、お身内はこちらでということである。お座主は、お式での重い装束のままこちらにいらつしやつてご挨拶下さるといふ。その細やかなお心遣いも有り難いことである。

やがて下手からお座主が登場。万雷の拍手の中を、座敷を通つて正面にお立ちになられた。簡単なご挨拶の後、乾杯の音頭を取られる筈であつたが、お座主は都ホテルでなかつたことを詫びられた後、比叡

山の伝統について語られたので、乾杯の時間がなくなって、そのまま退出せねばならなくなってしまった。それもお優しいお人柄が滲み出たのであった。

お料理は、彩り美しいもので、全て手のかかった真正正銘の精進料理である。お刺し身はきつと湯葉のような大豆のグルテンが原料なのだろうか、いかにもそれらしく作られている。全て美味しくきれいに平らげた。

昼食後、特別のお計らいで、書院を案内していただく。大圓も二階に上がったのは初めてだという。煙草王と言われた人の屋敷を東京から移築したというその建物に、明治の豪商の富力を見たのだった。私は比叡山に登ったのは初めてだったので、主だった処を大圓が車で案内してくれた。谷間に幾つもの塔頭が建てられてある。どの建物も駐車場から離れていて下ったり登ったり大分歩かねばならない。「ここは修行地獄」とか「掃除地獄」とか、修行中に覚えた呼び名も教えてもらった。流石に疲れて来た。

大圓はそのあと霧ヶ峰へ直帰した。私は予約しておいた瀬田のビジネスホテルに一泊する。翌日は一日観光バスで京都を見物、哲学の道など散策して、また夜行列車に乗って鹿兒島に戻ったのだった。

一晩泊まったとはいえ、往復の夜行列車はさすがに堪えて、体の節々がまだ痛むが、幻のような美しい行列を忘れぬうちに、この文を書いている次第である。

(平成9年6月)